



さて、親父が女子たちを美月の母の実家に送って行き、ジョージをまじえた夕食の後、俺たちはとっぷり暮れたベランダで、ほのかにライトアップされたスカイツリーを見ながら夜風にあたりついていた。空には夏の天の川。ほんの300年ほど前までは考えられなかった夜空だ。このあたりは住居地域で灯りも少ない。湾岸部の都心も、今ではなるべく空を明るくしないような配慮がなされている。なので、東京の真ん中でも天の川が見えるのである。

「いい所だよね、ここは」

風呂上がりのジョージが冷たい麦茶を手にしながら言う。

「ああ。でもちよつと寂しすぎるかもしれないけどな。雰囲気はまるで田舎だし」

「でも、地上で見る星空はいいよ。どうもまたたかない星は違和感があつてね」

「へえ、ジョージがそんなことを言うなんてな」

「ひどいな。僕にだってそういう情緒的な部分はあるさ」

たしかに、現代技術の申し子みたいなジョージだが、意外とロマンチックな一面もある。彼がパスフリーズに古い詩の一節を使ったりしているのは周知のことだ。たとえば、訓練艇の機関をメンテナンスモードに切り替えるパスフリーズは、大いなる鳥よ、その秘めたる力を我に貸し与えたまえ、である。念のために付け加えるならば、パスフリーズは、ジョージ本人以外が入力しても受け付けられない。資格確認は、インターフェイス経由で厳密に行われているからだ。パスフリーズをあえて使うのは、本当にその機能を実行するかどうかを、厳密に確認するためである。多くの機能は、仮想パネルや通常の音声指示などで操作できるが、特に重要なものや、間違つて起動すると危険な機能はパスフリーズでロックすることができるのである。学生たちの間では、ジョージが詩の一節を使っているように、自分の好みの文章の一節を使うのが流行っている。入力しているのをはたで見ていると、なにやら中世魔術の呪文のように聞こえることから、パスフリーズのことをスペルと呼ぶ者も多い。

「ケンジ、中で冷たいものでも飲まないか」

親父がベランダの戸口から、ビールのグラスを片手に顔を出す。どうせ、酒の肴にあれこれ話を聞こうという魂胆なのだろうが、ジョージも親父と話をしたがつっていたから、とりあえず

誘いに乗っておくことにしよう。

「ああ、今行くよ」

そう言うと、俺はジョージを促して、部屋に戻る。テーブルの上にはビール瓶と、ジュースが何種類か。さすがに未成年の俺たちがビールを飲むわけにはいかない。そんなことをしたら、実習からはずされて謹慎させられてしまう。アルコールを飲んだかどうかは、VMIにアクセスすれば確実に検知できる。血液にアルコール分が残っていなくても記録は残るのである。教師が気づく前に、きっとマリナに悲しい思いをさせてしまうから、そっちのほうが辛い。

「さあ、座って座って」

親父はご機嫌だ。これは、適当に理由をつけて切り上げないと、寝かせてもらえない可能性が高い。

「あなた、明日があるんだから、ほどほどにしときなさいよ」

さすがお袋だ。きつちりクギを刺してくれた。だが、お袋が寝てしまえば、その効果も続かない。

「わかってるよ。せっかくケンジが帰ってきたんだ。たまには、あれこれ話を聞きたいだろ。おまえもどうだ？」

「遠慮しておくわ。どうせ、私にはわからない話になっちゃうんだから。ケンジの話はまたゆつくりと聞かせてもらおうわよ。それから沙依、あんた今日の分の宿題は終わったの？」

「えー、沙依も、お話ししたいのに」

「あんたは、そうやっていつもサボるんだから。先に宿題を片付けちゃいなさい」

「はーい」

沙依はしぶしぶ自分の部屋に戻っていく。さすがの沙依もお袋には逆らえないのである。

「さて、落ち着いたところで、あっちでの話を少し聞かせてくれないか」

「いいけど、あまりマニアックな話を持って行かないでくれよ」

「わかってるよ。でもな、聞きたい話はいっぱいあるんだ。シャトル事故の話もそうだが、

さつきの訓練艇のコンピュータの話とかな」

「あれこれ言われても、こつちが困るから話を絞ってくれると助かるんだけど」

「それじゃ、訓練艇のコンピュータからいこう。そもそも、1Bシリーズと2Aシリーズじゃ、ハードウェアインターフェイスの規格は同じでも、アーキテクチャが全く異なるだろう。ソフトウェアは大幅な書き換えが必要になるはずだが」

「ほら、いきなりマニアックな・・・てか、親父は自分がマニアックな人間だってことをわかってないよな」

「まあまあ、ケンジ。その話は僕がするよ」

ジョージが脇から話に入ってくる。

「おつしやるとおり、ソフトウェアはまったく違います。でも、スクラッチで起こすのは大変なので、1Bシリーズのソフトウェアをコンバータにかけて、2A用に変換して、それから一部を手作業で微調整したんです」

「コンバータって、それは君が作ったのか？」

「そうですね。以前から2Aシリーズのコンピュータには興味があつて、シミュレータを作つて遊んでましたから。旧式のソフトを変換するコンバータは、そのために作ったものを流用しました」

「性能的には？」

「そうですね。そこはどうしても、ネイティブなソフトに比べると落ちますが、もともと1Bシリーズ自体が、旧型のコンピュータ前提の設計なので、十分すぎるくらいの余裕は持てるんです。だから、あれこれおまけの機能も入れることができたので」

「おまけの機能って、さっき話していた自律制御のシミュレーションとか？」

「そうですね。これも、遊びで作ったものの焼き直しなんです。処理能力の余裕を使って、2Aシリーズでは、各部分の制御用コンピュータが直接やっている情報交換や、パラメータの自動修正をフライトコンピュータが仲介してやるようにしました。インチキですが、見かけ上は自律制御っぽい動きができます。残念ながら、本物と違って、フライトコンピュータがダウンすると使い物にならなくなりますから、非常時のマニュアル操縦では使えませんけどね」

「でも、フライトコンピュータがアシストしてる状態でのマニュアル操縦だと、だんだん反応がスムーズになっていく感覚がすごくいいよね。オリジナルを使つたときは、こつちが慣れないと動いてくれなかったのが、コンピュータが自分に合わせてくれるから、ずいぶん楽しいよ」

「だが、おまえたちだけそんな楽しんで大丈夫なのか？」

「たしかに、現時点ではズルしてる感じなんだけど、いずれ1Bシリーズは全部改修する予定なので、附属高的には、俺たちを実験台にして訓練課程を新型にあわせていくつもりらしい」

よ」

「なるほど。しかし、面白そうなことをやってるじゃないか。羨ましい限りだな」

「面白いと言えば、今、ちよつとアカデミーの新しいプロジェクトに参加させてもらってるんですけど、そっちがなかなかエキサイティングですね」

「おい、ジョージ。その話、しちゃっても大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。プロジェクトの存在自体は公表されてるし、だいたいオブザーバーの僕がタッチできる情報は、機密扱いじゃないものだけだからね」

「もしかして、新型コンピュータ開発の話か？」

「そうだよ。よく知ってるな」

「そりゃ、俺だつてその道の研究者の端くれだからな。情報は入ってきてるよ。なんでも、新型の量子演算ユニットを開発中だろうだが、ジョージ君もそれに関わってるのかい」

「そうです。もともとは1Bシリーズのフライトコンピュータ更新プロジェクトに参加していたんですけど、更新は2Aシリーズのをそのまま使うんじゃないくて、新しく開発した演算ユニットを使おうということになったので、そちらのプロジェクトにも参加することになりました」

「なんでも、量子演算の多重化率を大幅に上げたそうじゃないか。それに消費エネルギーもずいぶん下がったそうだな」

「ジョージ、あれ見せてよ」

「そうだね、ちよつと持ってくる」

ジョージはそう言う自分の荷物から、例の小箱を取り出してきた。

「それは？」

「ポケットサイズの小型コンピュータですけど、このサイズで、1B型のコンピュータくらいの能力はあるんですよ」

「ということは、入ってるのは新型の演算ユニットだな。ちよつと見せてくれないか」

「ちよつと中を開けてみましょうか」

「たのむ」

ジョージは、小箱の裏蓋をはずす。中にはぎっしりと部品が詰まっていて、そのうちのいくつかは淡い緑色に光っている。

「すごいな、このサイズまで演算ユニットを小型化したのか。しかも、この小さいパワーエレメントだけで動くなんて」

「エネルギーの補充なしに2, 3日は動きますよ。これでフライトコンピュータを作れば、非常用のパワーでもフル稼働できます」

「なるほど、噂には聞いていたが、これほどまでとは思わなかったよ。これを実用化できれば、様々な用途で革命が起きそうだな」

「僕もそう思います。そういう意味では、このプロジェクトに関われたのはラッキーでした」

「これをもう少し小型化できれば、DIユニットにも組み込めそうだが、そうしたら、DIに高度な学習機能を持たせることも出来そうだな」

「おっしゃるとおりです。そういえば、お父さんはそっち方面の研究もされてましたよね。たしか、ニューラルネットワークを使った神経回路インターフェイスの設計理論とか」

「よく知ってるね。最近はこちらと遠ざかってるけど、若い頃はそっちの研究を結構一生懸命やってたんだ。まあ、理論だけで、今の技術だとまだ十分な実装まではできないんだけどね。でも、これが出来ると、まんざら夢でもなくなるな」

「実は、アカデミーの図書館で、書かれた論文を読んだんです。実際、新型のコンピュータ開発に、あの理論を取り入れようという話もあるんですよ」

「それは本当か？ なるほど、最近、あの論文に関する問い合わせが増えたのはそういうことだったか。主にアカデミー方面からの問い合わせが多いのも納得がいくな。自分では若気の至りな論文だと思ってたんだが、今になって役に立つとはね。うれしい話だよ」

「記号化されていない人間の抽象思考とコンピュータを直接インターフェイスできれば、それは、人間自身の能力の大幅な拡張にも繋がりますから、今回のコンピュータ開発のソフトウェア面での大きなテーマのひとつでもあるんですよ」

「それは僕もずっと夢見ていた事なんですが、大がかりな設備があるので、あきらめてしまってたんだ。ちょっとした真似事めいたことは何度かやったことがあるんだけどね」

「あの論文に書かれていた抽象思考を伝送するためのコーディング方式は、今検討されている要件に最も適合しているという話ですから、おそらく今後、標準的な方法として採用されると思いますよ。ところで、その真似事みたいな、ってどんなことをされたんですか？」

「その抽象思考コーディングをDIユニットに実装するとかね。まあ、実装しても相手方がいないから話にならないんだが。実はケンジには黙ってたんだが、ケンジのDIユニットにもその機能は入れているんだ。まあ、単なるおまけだけだね」

「なんだよ、俺は実験台なのか？ 他にも変なもの入れてないだろうな。まさか、これが親父のお手製だなんて思ってもみなかった」

「でも、あれは、インターフェイスポイントの側にも対応する神経経路が必要なんじゃないですか？」

「鋭いね。そのとおり。だから、実際は無用の長物なんだ」

「あのなあ、そんな役にも立たないものを入れるなよ。下手にバグったりしたら大変だし」

「お父さんは遺伝子工学にも詳しいようですね。その種のインターフェイスは、神経系に関する遺伝子工学の知識が必須だと思いますが」

「あはは、君には驚くよ。そのとおりだ。でも、実は僕自身が考えたわけじゃなくて、知り合いの遺伝子工学者のアイデアをいただいたんだ。今じゃ有名になったから、たぶん君たちも知ってるんじゃないかな。アンリ・ガブリエルって」

「アンリ・ガブリエル!？」

「どうした、ケンジ。何をそんなに驚いている。父さんにも有名人の知り合いの一人ぐらいはいるぞ」

「そうじゃなくて、アンリ・ガブリエルって、美月の親父さんじゃ・・・」

「なんだって? やっぱりそうなのか? ガブリエルって名前を聞いたときはまさかかなと思ってたんだが」

「そうだよ。彼女はアンリ・ガブリエルの娘。星野は母親の姓なんだ」

「星野美空だったな、あの二人の結婚式には招待されてただけど、結局行けなくてな。おまえとお前と同じ年の娘がいるってのは知ってたんだが、まさか同級生になってるとは。こりゃ、何かの因縁かもしれんな」

「あのなあ、因縁なんて不吉なこと言わないよな。ただでさえ、あいつには手を焼いてるんだから」

「そう言いながらも、結構仲はいいと思うけど?」

「おい、余計なことを言うなよ、ジョージ」

「彼女、ってわけじゃないよな」

「まさか」

「そういえば、今日のクラスメイトたちは、みんな、なかなかの美人さんじゃないか。ケンジの本命は誰なんだ?」

「あのなあ、親父。どうしていきなり、そういう話になる?」

「僕もそれは知りたいな」

「おい!」

いきなり、なにやら話が変わる方に逸れている。危ない危ない。ここに沙依がいたら大騒ぎだ。

あいつが戻ってくる前に、この話は終わらせないと・・・

「沙依も知りたいな。てか、お兄ちゃん、沙依に無断で彼女作っちゃだめだよ!」

「小姑か、お前は! だいたい、宿題は終わったのか」

「終わったよ。ちよろいちよろい」

これはまずい。一番まずいときに戻ってきたものだ。早く話題を変えないと。

「本命、当ててあげようか？」

「だからないって」

「そうかな、いい感じだと思っただけだな」

「ほお、で、沙依は誰だと思っただ？」

「親父、余計なことを言うなよ！」

ほんと、親父は余計なことを言う。だいたいいつも沙依に乘せられてお袋に小言を言われているわけで・・・

「あのねえ。沙依の勘だと、マリナさんかな」

「さ、沙依。なんでマリナ・・・」

俺はちよつと絶句して思わず赤面する。

「ほら、凶星でしょ。お兄ちゃんのことなら沙依はなんでもわかるんだからね」

「ち、違う。断じて違うから」

「ほら、ムキになるのが、あからさまに怪しいでしょ。お兄ちゃんは、ああいう頭が良くてでも、ちよつと天然な人を好きになっちゃうんだから」

「へえ、ちよつと意外だな。僕は美月だと思っただけど」

くそ、ジョージがまた余計なことを。

「うん、沙依も美月さんのほうがいいと思うな。でも、美月さんとお兄ちゃん一生下僕にされちゃうよ」

「げ、下僕だと？」

「お兄ちゃん、優しいからさ。ああいうちよつとワガママな感じの人だとリードさせちゃうのよね」

「お前は俺の何だ？」

「妹だよ。もちろん」

沙依は、思い切りの笑顔でそう言う。いま이지만、こいつの言うことはいつも大きく外れない。だから困るのだ。これを彼女たちの前でやられたら最悪である。俺たちが出かける先

に、こいつも付いてこようとすることに違いはない。女子たちにうまくとりいられたら阻止するのは難しくなる。どうするか考えておかないと・・・

「ケイちゃんとかの目はないのか？」

「親父！」

「うーん、ケイさんだと沙依はちょっと複雑かな。だって、ケイさん、沙依と似てるんだもん。沙依のポジション取られちゃいそうだから」

「なんだ、そのポジションってのは」

「妹、兼、突っ込み役だよ、お兄ちゃん。妹ポジションは守れるけど、お兄ちゃんの突っ込み役を取られちゃうのは辛いな」

「あのなあ、俺はボケ役か？」

「それは相手によるんじゃないの？」

いきなり後から話に入ってきたのはお袋だ。いかん、いよいよ俺の立場がきつくなってきた。

「さすが、お母さん。それは沙依も思うよ」

「ケンジは相手に合わせるのが上手よね。悪く言えば、合わせ過ぎちゃうんだけど、個性が強い子が相手なら、どんな子でも無難にやれると思うわ。逆におとなしい子だと悩んじゃいそうよね。マリナちゃん狙いなら、もう少し修行が必要ね」

「まったく、同感です」

「.....」

くそー、唯一沙依の天敵であるお袋と結託されてしまうと、分が悪すぎる。かと言って、親父はあてにならないし、どうしたものか。このままだと、ジョージの前で、俺は丸裸にされてしまう。

「ちよつと話を変えようぜ。なんでこんな話になるんだよ」

「だって、お兄ちゃんの女性関係は沙依の一番の関心事だよ。ねえ、お母さんでもでしょ」

「そうね。息子がそのあたり、うまくやってくれないと親としても困るしね」

「そうだな。そこは父さんも心配だ」

「そうね、あなたの息子だし」

「母さん、そりゃどういう意味だ」

「あら、そういう意味よ」

いかん、これは男性軍の窮地だ。どうやって話題を変えようか。このままでは、どんどん深みにはまって行きそうだな。

「なあ、お客さんもいるんだし、そういう話はまたにしようぜ」

「そうだな。そうしよう」

どうやら親父も、いつのまにか自分が俺の側にいることに気がついたみたいだ。

「そういえば、母さん。美月ちゃんって、やっぱりアンリの娘さんなんだそうだよ」

「え、そうなの？それは、びっくりだわ。やっぱり何かの縁かしらねえ。不思議な話よね。でも、だったらちようどいいじゃない。ケンジにあれ渡しちやいなさいよ」

「そうだな。ちよっと持ってくるよ」

親父はそう言うのと立ち上がって、自分の部屋のほうへ歩いて行く。

「あれ・・・って？」

「お父さん、ケンジの誕生日にプレゼントを用意してたのよ。今回、帰ってこなかったら送ろうかって言ってたんだけど」

「プレゼント？ いったい何を」

「それは見てのお楽しみ。て言うか、私にはよくわからない代物なんだけど」

「それと美月とどういう関係が？」

「見ればわかると思うわよ」

なんだか話がおかしな方向に流れている。しかも、美月と俺が、実は家族レベルで繋がっていたというのもびっくりだ。俺は、なかなか戻ってこない親父を待ちながら、あれこれと考えを巡らせていた。